幻の児島湾産天然鰻「アオ鰻」を食し、
藤田伝三郎氏が手がけた干拓事業を顕彰

藤田伝三郎が手掛けた干拓事業の史跡を巡り 天然の“アオ鰻”を食する児島湾探索ﾊﾞｽﾂｱｰ

日 時： 2009年 5月24日（日）

ＪＲ大阪駅→ホテルオークラ岡山（天然ｵｱｳﾅｷﾞと瀬戸内の海の幸ランチ）→児島湾干拓資料室→藤田神社（藤田伝三郎太鼓鑑賞）・桜の馬場樋門→丙川三連樋門→大阪駅

藤田伝三郎 ： 天保 12 年 5 月 15 日～明治 45 年 3 月 30 日(1841～1912) 。萩出身。2 歳年上の高杉晋作の実家裏の造り酒屋の 4 男として生まれ、29 歳で大阪に出て、リーガル・関西電力・琵琶湖汽船・阪堺電鉄・南海電鉄・東洋紡績・大阪毎日新聞など今も関西経済の担い手として活躍する企業の創業に関わると共に、石見銀山や小阪銀山や、児島湾の干拓事業なども手掛け、大阪商工会議所の初代五代友厚を助け二代目会頭を務める。
私生活では、茶道や舞い、能楽、造園に趣味を持ち、骨董品収集のコレクターとしても有名で、戦災を免れた蔵は藤田美術館として親子 2 代にわたって集めた五千点（国宝 9 件、国の重要文化財 50 件を含む）の収蔵品が保管・展示されている。

新型インフルエンザにも負けず岡山へ

神戸から広がった新型インフルエンザ騒ぎは大阪にも飛び火した。参加者の体調不調に気を使ったが、最も気を使ったのは火種である大阪からの訪問者を迎える感染圏外の岡山の方々かと思いつつ、2 月に下野さんの運転で大森さんと堀さんとで岡山に下見に行ったﾊﾞｽツアー企画を予定通り決行することにした。バスは大阪駅を予定の 8 時半に出発した。薄曇りの空模様を気にしながら、一路岡山に向かってひた走る。
11 時半にホテルオークラ岡山のエントランスに着いた。すぐに迎えいれられるままに宴会場に案内された。会場の前には芝生と目にも涼やかな白滝が岩を下る庭が広がっていた。

ホテルオークラ岡山にてアオ鰻と海の幸を満喫！

ここで今回の目玉でもある貴重な天然うなぎ漁を専門に漁をする清水氏と合流することになっていたが、更に思わぬゲストが！児島湾に行くなら是非天然鰻をと紹介いただいた前大手門学院大手前中・高校の校長・亀井哲夫先生も会場へ！
自己紹介の後、アオ鰻は天然鰻の中でも藍で染めた薄い青色の「浅葱（あさぎ）色」をしてい、口や頭が細く尖っていて海水と淡水が交わる河口や干潟で一生を過ごすため川魚独特の臭みがなく身がしっかりと締まり、もちもちした皮の食感が特徴で特別に美味であるなどと紹介いただき、亀井氏が纏めた“鰻談・アオウナギを喰う”という資料を配布いただいた。
そこには、万葉集で大伴家持が「石磨に、われ物申す　夏痩せに　吉といふ物ぞ　武奈伎（むなぎ＝うなぎ）」と夏痩せには鰻が夏バテに効く栄養食や強壮薬として歌っていることや、上方では丸ごと鰻を串にさして焼いてから切って食べていたので、色彩的にも形状的にも川原に生えるガマの穂に似ているところから「蒲焼」と称され江戸にも伝えられたことや、ガマの穂を干して油を何度か塗り重ねた上に鰻の皮で巻いて更に油を塗って火を点すと雨の中でも濡れない「うなぎ松明」が重宝された事、鰻は虚空菩薩のお使いであると伝えられている事等が記されていた。

漁師の清水氏からは、大阪からわざわざお越しいただき、児島湾のアオ鰻を味わっていただく機会を設けていただき感謝している。今日味わっていただくアオ鰻は昨日林料理長に届けたので、新鮮な天然鰻の滋味を、是非ゆっくりと岡山の海の幸と共に味わっていただきたいとご挨拶いただいた。

雨雲は退散。太陽も雲間から顔を出し始めたので、亀井氏と清水氏と林料理長もご一緒に、新緑も眩しい宴会場の前に広がる芝生の庭に出て記念写真を撮った。

お待ちかねのランチタイム！各テーブルには既に＜黒角盛り＞と　釜炊き飯（蛸、真鯛）が用意されていた。

＜黒角盛り＞
一,岡山黄韮と青菜のお浸し
一,卯の花
一,真鯛真子ゼリー寄せ
一,瀬戸の鰆木の芽焼
一,瓢亭玉子
一,合鴨燻製
一,瀬戸内海苔酢浸し
一,湯葉巻白魚

塾生の大川氏の乾杯の音頭で、乾いた喉を潤して、＜黒角盛り＞で先ずはご当地・岡山の素材を生かした品々を味わっている間に、釜飯から鯛と蛸が蒸しあがる美味しそうな湯気が立ち上りはじめた。

お待ちかねの**児島湾の天然アオ鰻の白焼き**はわさびと白醤油で味わう。程よい弾力と上品な脂に、新鮮な上に海に住まいしながらシャコエビを主食としているので川魚の生臭がない。黙って出されればこれが鰻とは思えないほどだ。天然鰻の美味しさは、食べなれている脂ギトゴトの養殖鰻とは異色の食べ物ではないかと、正に目から鱗が落ちた。味の濃いたれを必要としないアオ鰻の美味しさに感動。更に、炊き上がった名物の蛸と鯛の釜めしと共に、外付けの**瀬戸の穴子茶碗蒸し**に、**揚げたての海老と南京と青唐の天ぷら**や止め碗には磯の香り一杯の地元ならではの**瀬戸海苔の味噌汁**を味わった。

ペストリーデザートとカシスフルーツのデザートを４つの円卓を囲んでゆったりとしたスペースで楽しんだ。会場には藤田から下見の時にもお会いした農業を営む槌田正則さんが案内役として同席いただいた。

ゆっくりとアオ鰻と岡山の海の幸を楽しんだところで夏にはビアガーデンの会場となるホテルオークラ岡山の屋上に特別にあげていただいた。春霞がかかっていたが、ホテルは丘の上にあるので岡山駅界隈のビル街から児島湾の奥に広がる瀬戸内の海を見渡す事ができる 360 度のパノラマを楽しんだ。槌田さんから旭川の周囲に広がる平野がすべて干拓地であったことなどを紹介いただいた。

雲行きが怪しくてなってきた。次の目的地に急ぐ。

※今回のメニューは、アオ鰻も入れてと団体で予約し事前にお願いした特別メニューです。アオ鰻（児島湾鰻＝シャコ鰻）を食したい人は、１週間程前に予約を入れてご確認ください。時価でアオ鰻丼は 8,800 円前後。
ホテルオークラ岡山　日本料理　涼々亭（そうそうてい）
TEL.０８６－２７３－７３１１

海を干拓し農業の企業化を夢見た藤田伝三郎

バスは市街地を抜け**児島湾締切堤防道路**の途中にある児島湖堰堤児島湾中央管理事務所内に設置された**「児島湾干拓資料室」**に辿り着く。雨が降り出した。急ぎ資料室に走りこんだ。靴を脱いでスリッパに履き替えて、先ずは 2 階の会議室に移動。

円卓の真ん中で、休日返上で所長が児島湾の干拓についてご説明いただいた。窓に大粒の雨が降り注ぐ、時折ツバメが雨に驚いたように飛び回り児島湾も波打っている。

所長からは岡山平野の南部一帯は「吉備の穴海」と呼ばれた美しい海で、吉井川・旭川・高梁川という大きな河川の上流から運ばれた土や砂が堆積して干潟が発達し、既に江戸時代までに干拓によって新田が開発されていたが、明治時代になると大阪の豪商･藤田伝三郎が約5500haという前人未踏の広大な干拓工事に挑戦。終戦後には国営事業に引き継がれ、児島湾は合計2万ﾍｸﾀｰﾙもの海が干拓によって美田に生まれ変わった八郎潟・有明海と並ぶ日本三大干拓地の一つである歴史を紹介いただいた。

お話を伺いながら、明治政府ですら**オランダの外国人技師Ｒ．ムルデル**が策定した荘大な児島湾干拓事業に手をつけることができなかったというのに、その“世紀の大事業”に挑戦した藤田伝三郎の夢について考えていた。訴訟してまで工事が始まったのは明治32年で、当時はまだコンクリートもない時代。潮止め堤防は、粗朶・捨石・漆喰固めなど機械に頼らない人海戦術で、埋めては沈む底なしのような泥海との戦う難工事に莫大な資金を投資しつづけたのに、伝三郎は一度きりしか岡山に足を運んでおらず、二区の完成も見ずしてこの世を去った。

事業は、二代目の平太郎氏に引き継がれ、干拓した一区・二区の1,758hの内、1230haが藤田農場として完成。大海原を大きく区分けした水田に干拓し、アメリカから最新鋭のトラクターや脱穀機や乾燥機などを導入し管理棟を建設。個人の力に託されていた農業の近代化と企業化を実現していたのだ。正に現在、高齢化や減反政策で疲弊する日本の農業の企業化が試行されているが、時代を先読みした耕地の干拓から耕作・農作物の管理まで一貫運営するデベロッパーを実現させていた。しかし、昭和2年の金融恐慌で藤田組の中核である藤田銀行が倒産。なおも伝三郎の意志を継いで干拓は続行されるが、3区、5区の干拓地は戦時色が濃くなる中で、県の港湾用地や軍の飛行場用地として転用され、戦後は、農地解放によって藤田組は多くの干拓地の権利を失った。

「夢から始まる…児島湾の夢」大海原を干拓し農業の企業化を図るという誰も思いつけない大事業に挑んだ藤田伝三郎あればこそ、そこに今農地が広がっている。幕末の事業家は、藤田伝三郎は夢みた事に着手しつづけた先駆者だったのか…。岡山の小学校の教科書には郷土の恩人として藤田伝三郎の偉業が紹介されているという。

石見銀山の清水谷精錬所跡に立った時もやはり藤田伝三郎の驚くほどの大きさを感じた。水力発電所を敷設し、

自家発電しながら工場やトロッコを動かすなど、世界遺産センターで往時の近代的で大規模な工場の様子を再現されているコンピューターグラフィックックには目を見張るものがあった。何事にも徹底的にこだわった経営者の姿勢が末端までも動かしていた。今のように機材に頼る工法がない明治時代に、職人技を結集させ精魂込めて土木工事を手掛けていった藤田組の拘りや誇りが、雨風に打たれても崩れない強固な石組から感じとれるほどだった。資料館に展示されていた「藤田組」という半被や、旧家に残る祝酒を振る舞った酒瓶を見るにつけ、藤田伝三郎という人が確かにいたのだと背筋を伸ばして敬意を払いたくなった。きっと小柄ながらも、千里眼のように眼光鋭く輝いていたに違いない。ここにも藤田伝三郎の大きな夢が広がっていた。

所長の児島湾干拓の歴史についてのお話を聞いた後、３階の児島湖堰堤児島湾中央管理事務所で児島湖樋門の操作状況を見学する。その堤は、岡山市内に向かって左手が倉敷川と笹ケ瀬川が流れ込む淡水の児島湖で、左手が旭川、百聞川と吉井川の川の水が流れ込む児島湾であり、淡水と海水が混じらないように、海水の方が水位の低いときのみ堰を開け湖の水位を夏はAP+0.8m、冬はAP+0.5mに保つため（夏期は水田のため、冬期は麦のため多すぎると困るため）二十四時間体制で管理し随時操作を行い、船の往来も潮の満干に合わせて水位を調整し橋渡ししている。案内図の前で記念写真を撮った。

更に、管理事務所の１階の干拓資料室のパネルには、手作業で海を堰き止め干拓していく当時の土木工事に携わる男たちの写真パネルや、奈良時代から続く干拓の年代図や資料などが整然と展示されていた。

藤田伝三郎の御縁で藤田神社参拝

吹き降りだった雨が小ぶりになったところで、最終目的地、藤田神社に向かう。途中旧藤田村に入るとそこは細切れにはなく、正に碁盤の目のように整然と大きく区分けしてある水田が広がる。かつてこの水田をアメリカから導入した最新鋭のトラクターが走り回るなど、集団農場経営が行われていたのだ。
藤田神社に到着した私たちを、藤田の方々がお迎えいただきバスを降りた所で冷えた缶コーヒーを手渡していただき歓待いただいた。

更に、到着に合わせて神社奥から勇壮な太鼓の音が…。どうぞと促されて神社の奥のステージまで進むと、一千万円かけたという大太鼓を中心に小学生の男のまでもが見事な撥捌きで演奏する「藤田伝三郎太鼓」のメンバーと関係者が休日返上で、雨の中神社のステージに太鼓を運び入れての熱演だった。
さきほど干拓資料館から実際の児島湖を眺め人海戦術で海を切り開き埋め立てた当時の写真などを眺めていたので、ドンドコドンドコという響きが、夢に向かって苦難や危険を恐れず干拓事業に挑む続ける男たちの雄姿や、塩害に悩まされながらも農作を続けた人々の姿を彷彿とさせるようで胸に迫り、また夢とロマンをかけて事業を進めた藤田伝三郎という一人の明治維新を駆け抜けた男性の熱い鼓動が蘇ったようにも響き、干拓地に託された沢山の思いや鼓動を呼び起こしているような太鼓演奏に感動した。

演奏終了後、大正4年に藤田組によって建立された藤田神社の宮司と大曲連合長会長の増田会長の歓迎の挨拶を受けた。
藤田伝三郎太鼓の方々と一緒に記念碑の前で集合写真を撮った。雨は暫し降り止んだ。

この記念碑は、藤田組二代目の藤田平太郎の死後、故人の遺志を伝承して藤田家所蔵の美術品を大阪にある財団法人藤田美術館に寄付。自らも理事長兼館長の要職についた夫人・富子の歌碑で「神のかもり　御代のめぐみに、豊秋の穂波はろかに、日にかかよへ里」と昭和11年9月26日に藤田農場を巡視した際詠んだ歌碑。
　その隣には藤田伝三郎が岡山研知事・高崎親章より児島湾干拓起工許可を受けてから100周年となるのを記念して、2000年に建立された藤田伝三郎顕彰碑の表には藤田伝三郎の胸像が刻まれていた。

母への思いと重なるような郷土愛一杯の増田会長

藤田神社から伝三郎太鼓のメンバーに見送られてバスは発車。槌田氏に加え藤田の歴史を積極的に顕彰されている増田会長がバスに乗り込みご案内いただいた。今回の受け入れも、出身地の萩で藤田伝三郎を顕彰する市民団体「香雪会」の方から、萩市長と共に岡山を訪問された時に増田会長が熱心に藤田神社や樋門など旧藤田村の史跡を案内いただいたと連絡先を教えていただいた。その電話番号を頼りに2月の下見の時も訪ねていったら、大雨の中、町内会の他の役員のか方々にも声をかけて神社にお集まりいただき私たちの受け入れを快諾。今回の藤田伝三郎太鼓での歓待をご準備いただくことになった。地域の歴史を地元の人から聞く時、そこには誇示されることのない母親への思いと重なるような郷土愛を感じ、お仕着せの官公庁のお金をかけたパンフレットよりも温かみを感じる。血の通った郷土愛を、村の子供たちだけでなく、私たちのような遠方からの客をも暖かく迎え入れていただいた。

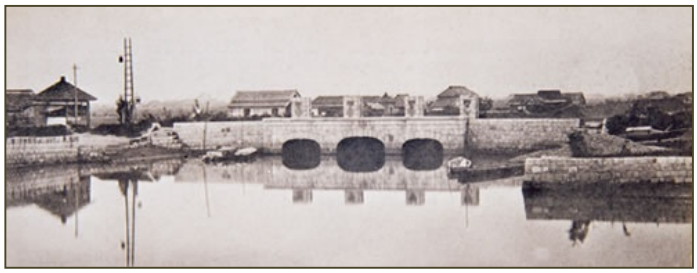
熟塾の活動のなかで、袖すりあったに明治維新という変革期を生き抜いた藤田伝三郎という豪傑の姿を追い求めているうちに、彼が莫大な資金をつぎ込み干拓した児島湾に辿り着き、藤田神社にも参拝することができた。

市民に守られ陸に上がった桜の馬場樋門

先ずはJAの販売所で地元の農産品を購入。
途中、国道30号線をバスが走った時に、右手の第二区が先に干拓された時には、妹尾川の向こうに広がる六区はまだ一面の海であったと、今は住宅地や水田を指さしながら説明を受けた。
雨は小雨になった。バスを止めて暫く歩くと、グラウンドの傍に見るからに長い年月の風雪に耐えてきたというがっしりと組まれた赤れんが作りのイギリス式のアーチ型“桜の馬場樋門”が鎮座していた。
かつて妹尾川三連樋門への荷物の運搬に用いた馬をつなぎとめておく場所であったことに由来しているそうだ。職人が丹精込めてく組み上げた樋門が川に浸かっていたところには貝殻が付着し活躍していた様子がうかがわれた。
その美しい樋門が2003年に、国道30号線の拡張に伴い取り壊される運命にあると聞かされた市民は立ちあがった。藤田の干拓の歴史を語る証言者が少なくなるなか貴重な遺産として次の世代へ伝えるべく「桜の馬場樋門を守る会」を結成。岡山市に嘆願するなどの活動を続け、遂に瓦礫となる寸前で藤田スポーツ広場に移築保存することができたそうだ。
陸に上がった樋門は、今も藤田の人々を見守っていた。

人々と共に明治生まれの三連式樋門は今も健在

まっすぐに続く農道にバスを停めて暫く歩くと、川の傍の大きな橋に出会った。明治37年7月に完成し、今も現役で活躍する明治期の三連式の排水樋門である。



明治・大正・昭和・平成の世の流れを、川面に映しながら人々の暮らしを眺めてきたのかと、風雪に耐えた頑強に組まれた花崗岩と赤れんが愛おしくさえ思えた。樋門の上で写真を撮って、ここで益田会長や地元の方とお別れし、バスは一路大阪を目指してひた走った。

今回のバスツアーでは、岡山･児島湾の天然鰻を味い、干拓の歴史と藤田伝三郎の偉業を目の当たりにした。営利目的を超えた理想家・藤田伝三郎の夢は、三連樋門同様に今も人々の暮らしと共に生きている。
幕末から明治維新へ時代の変革期に、伝三郎太鼓の躍動感ある響きに似た情熱を持って高杉晋作の薫陶を受けた伝三郎は藤田組や多種の企業を率いて経済界の騎兵隊を組み、高杉が見ることがなった明治という新しい時代の壁を切り開いていったのではないだろうか…。児島湾干拓事業についても、そのロマンと夢の大きさに改めて圧倒された。（原田彰子）

参加者：（敬称略・ｱｲｳｴｵ順）
一般：大塚良子・桑原秀夫・榊原田鶴・田浦ちずこ・高木典子・高島郁子・田代ゆう・鳥飼史郎・西口和夫・西口由美・吉井宏一
塾生：井上章・大川哲次・大西芳郎・大森史子・下野譲・中島一・中村孝夫・浜田真弓・原田彰子・丸山公子・水本洋光・村上福寿郎・米川俊信